CCI 文部科学省科学研究費補助金
基盤研究 (S)
アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築

ANNUAL REPORT
年次報告書
2022

Caregiver Child Interaction

プロジェクト代表より

2022年度を振り返って

高田 明　京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

高田 明

科研費基盤研究S「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築」の初年度となる2022年度の年次報告書をお届けいたします。本研究プロジェクトは、近年よく叫ばれるようになった「子育ての危機」に挑むものです。現代社会の危機の多くは近代が内包していたもので、それらに直面したとき、私たちはしばしば狩猟採集民を振り返ります。そのルーツは、近代の夜明けにまで遡ります。18世紀後半、ルソーは「自然人」、すなわち自然状態の人間として、不平等がほとんど存在せず、小集団で自律的に暮らす人々を思い描きました。20世紀になると、初期の人類学者たちが、こうした自然人を彷彿させる狩猟採集民についての報告を行うようになりました。そうした研究は、現代社会の根幹をなす人間像にも反映されてきました。しかし、その後も研究は大きく進展しており、初期の報告には必ずしもあてはまらない狩猟採集社会の姿が明らかになっています。今や、ルソーの手のひらから抜け出し、生態環境、周囲の諸民族、国家などの社会制度と関連づけながら、狩猟採集社会の文化的多様性の形成過程を解明していくことが不可欠です。

　こうした観点から本研究プロジェクトは、我が国が世界に誇る狩猟採集社会の研究実績があるボツワナ、ナミビア、カメルーンでアクション・リサーチを展開し、得られた動画資料の分析に基づいて、狩猟採集社会でのハビトゥス、すなわち文化的な行為や思考を生み出す身体的性向とそれをとりまくマイクロ・ハビタット、つまり身近な行動環境、言語環境、制度環境が相互構築される過程を明らかにします。これにより、理論的には社会変容と社会化を結びつけて理解すること、実践的には、いま社会化しつつある子どものよりよい未来の構築を目指します。私たちは、本研究プロジェクトの進展を通じて、人文社会科学を基礎づけ直すとともに近年著しい成長を遂げているアフリカの社会や人々と共に学ぶことを目指しています。

CONTENTS

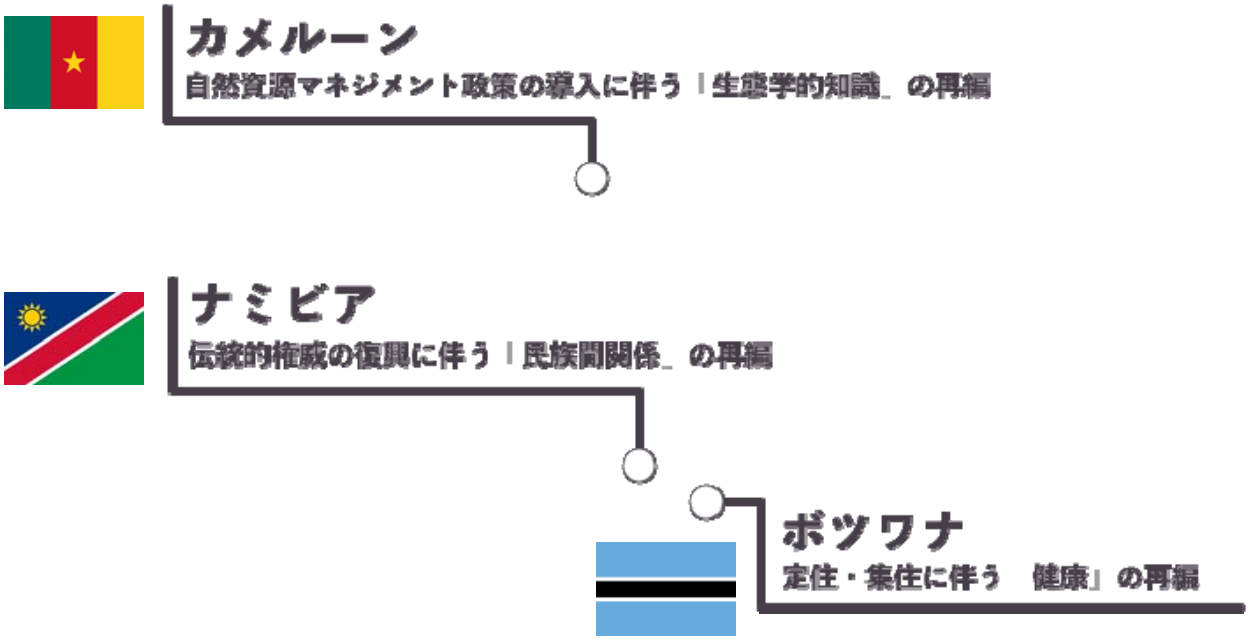
研究概要 / 研究テーマとメンバー / 研究地域 / 海外渡航報告 / 業績 / 活動報告 / 事務局より / 編集後記

研究概要

「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築」について

本研究では，アフリカにおける狩猟採集民と農牧民のコンタクト・ゾーンとなってきた3地域（ボツワナ，ナミビア，カメルーン）を主たる調査地域として，養育者－子ども（誕生～5歳）間相互行為に関するデータ収集・分析を行い，行動の社会化，言語の身体化，制度の内面化が生じる過程，及びそれに伴って行動環境，言語環境，制度環境が再編される過程を明らかにします。さらに，これらの分析の成果に基づいて，変化し続ける社会の中で社会化していく子どもが，よりよい未来に向けて新たなマイクロ・ハビタットとハビトゥスを相互構築していくことを支援します。

主たる調査地域では，特に以下の課題を設けます



研究概要

本研究の目的

本研究は，代表者らのこれまでの研究（e.g. Takada 2020）を受け，人生の初期（0～5歳）における主体，他者，文化，環境の結びつきを，養育者- 子ども間相互行為（Caregiver-Child Interaction，以下CCI）を通じてハビトゥスとマイクロ・ハビタット（相互行為を可能にする構造化された場; Ochs et al. 2005）が相互構築されていく仕組みと考えます。

乳幼児は間主観性を発達させることでハビトゥスを形成します。その過程では，生得的行動をその文化にあわせて社会化し（行動の社会化），他者が話す言語を身体化して使いこなし（言語の身体化），外在する制度を内面化して自分や社会を律して行きます（制度の内面化）。

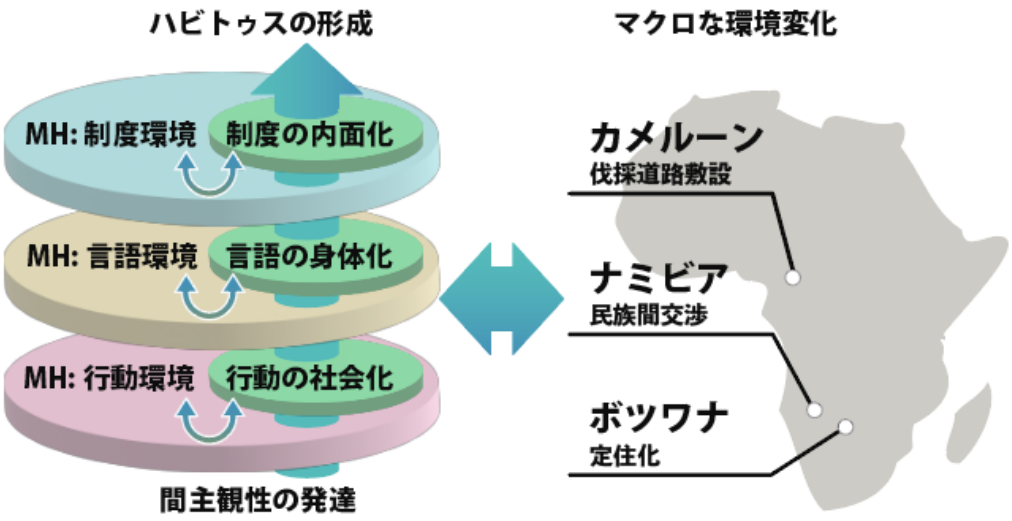
また，これらと対応した行動環境，言語環境，制度環境がマイクロ・ハビタットを構成します。ハビトゥスとマイクロ・ハビタットは循環的に相互作用しますが，それはマクロな環境変化が生じると再編されます。

本研究ではこのモデルを受け，ボツワナ，ナミビア，カメルーンを主な調査地域としたアクション・リサーチを行います。その目的は，理論的には社会変化と社会化を結びつけて理解すること，実践的には社会化しつつある子どものよりよい未来に向けてハビトゥスとマイクロ・ハビタットの相互構築を支援することです。

参考文献

Takada, A. 2020. *The ecology of playful childhood: Caregiver-child interactions among the San of southern Africa*, Palgrave Macmillan.

Ochs, E., Solomon, O., Sterponi, L. 2005. Limitations and Transformations of Habitus in Child-Directed Communication, *Discourse Studies* 7(4).



ハビトゥスとマイクロ・ハビタット (MH) の相互構築過程

研究概要

3つの国と地域

3地域を選んだ理由は,

（1）アフリカは今後数十年間，諸大陸中で最も大きな社会変化が見込まれ，グローバルな未来構築において重要なこと

（2）3地域が砂漠-ステップ(ボツワナ)，ステップ-サバンナ(ナミビア)，サバンナ-熱帯雨林(カメルーン)という幅広い気候環境をカバーすること

（3）3地域はいずれも狩猟採集民と農牧民のコンタクト・ゾーン(Pratt 2007)となっており，多様な自然観・生業・文化の交渉・融合・発展(e.g. Descola 2005, 2013)を論じる上で重要なこと

（4）3地域とも，代表者らによる継続調査の過程で本研究の推進に必要な，CCIをめぐる様々なアクター(e.g. 伝統的権威，行政機関，NGO，病院，現地研究機関)と代表者らとの社会関係が確立され，それらをめぐる社会的状況の理解や中長期的な見通しが得やすいこと，によります。

参考文献

Pratt, M. L. (2007) *Imperial eyes: Travel writing and transculturation*. Routledge.
Descola, P. (2005) *Par-delà nature et culture*, Gallimard.
Descola, P. (2013) *Beyond Nature and Culture*, The Univ of Chicago Press.

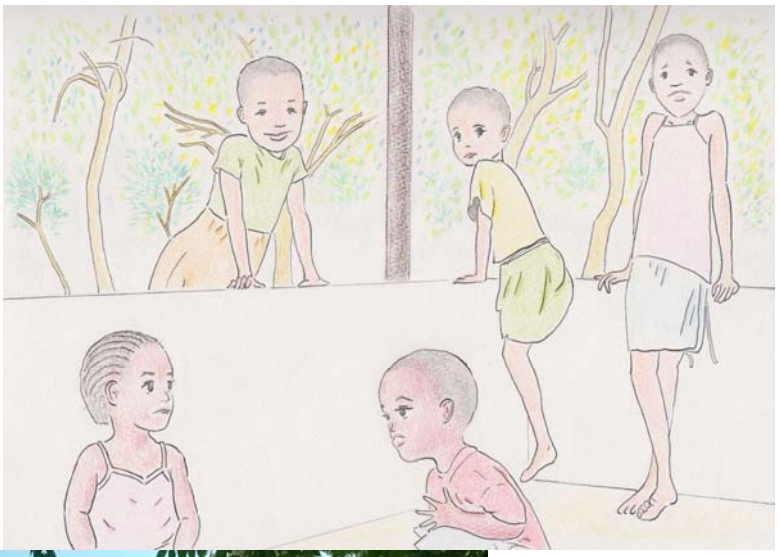
研究概要

期待される成果と意義

・CCIの微視的分析を通じて，方法論的個人主義による発達研究の弱点を克服．文化的に媒介された間主観性の発達過程と，行為による文化的枠組みや環境の改変過程の相互規定性を解明する。

・代表者らのコミュニケーション研究をエコロジカルな視座から 統合，発展させ，社会性の成り立ちを包括的に理論化．人類学，心理学，言語学，社会学，経済学等を架橋する学術領域を開拓・確立する。

・3地域でマクロな環境変化に伴う社会的コンフリクトを解決する創造的選択肢を示し，よりよい未来の構築を支援．早くから様々な困難に直面しつつも成長が著しいアフリカの諸社会と共に学ぶ。



研究テーマとメンバー (1)

行動の社会化

行動の社会化と行動環境の再編

養育者は子どもの生後すぐからその行動の規則性を間主観的に調律し(Malloch & Trevarthen 2009), 行動を社会化していきます。その過程で子どもは, その社会の歴史や文化を反映した行為を身につける一方, その歴史文化的な枠組みを更新・改訂していきます。

参考文献

Malloch, S., & Trevarthen, C. (Eds.). (2009) Communicative musicality: Exploring the basis of human companionship, Oxford University Press.

研究地域と研究課題 / 内容

ボツワナ：定住・集住に伴う「健康」の再編 (定住化) / 子どもの衛生行動の変容

ナミビア：伝統的権威の復興に伴う「民族間関係」の再編 (民族間交渉) / 農耕・離乳食の推奨による食生活の変化

カメルーン：自然資源マネジメント政策の導入に伴う「生態学的知識」の再編 (熱帯雨林分割) / 生業活動中の一時保育と多人数の養育

コアメンバー

分担者

山内 太郎 (北海道大学保健科学研究院・教授)

：人類生態学、国際保健学

山内 太郎

橋彌 和秀 (九州大学人間環境学研究院・教授)

：比較発達心理学、霊長類学

橋彌 和秀

連携者

原田 英典 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授)

：衛生工学、環境工学

原田 英典

藤岡 悠一郎 (九州大学地球社会統合科学府・准教授)

：地理学、景観生態学

藤岡 悠一郎

研究テーマとメンバー (2)

言語の身体化

言語の身体化と言語環境の再編

子どもは多様な記号論的資源(Goodwin 2000)を用いて歴史・文化的に構成された言語を身体化し，言語の様々なレベルの構造に習熟すると共に新たな知識を生み出し，その構造を改変していきます。

参考文献

Goodwin, C. (2000) Action and embodiment within situated human interaction, Journal of Pragmatics, Vol.32 (10).

研究地域と研究課題 / 内容

ボツワナ：定住・集住に伴う「健康」の再編 (定住化) / 物語りを用いた保健教育の効果

ナミビア：伝統的権威の復興に伴う「民族間関係」の再編 (民族間交渉) / 幼児教育に伴う多言語使用の分析

カメルーン：自然資源マネジメント政策の導入に伴う「生態学的知識」の再編 (熱帯雨林分割) / 伝統的知識の授業化と子どものEK習得

コアメンバー

中川 裕

安岡 宏和

外山 紀子

遠藤 智子

高木 智世

<u>分担者</u>

中川 裕 (東京外国語大学総合国際学研究院・教授)

：コイサン言語学、音韻論、音声学

安岡 宏和 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授)

：生態人類学、歴史生態学

<u>連携者</u>

外山 紀子 (早稲田大学人間科学学術院・教授)

：発達心理学

遠藤 智子 (東京大学総合文化研究科・准教授)

：相互行為言語学

高木 智世 (筑波大学人文社会科学研究科・教授)

：相互行為言語学

研究テーマとメンバー (3)

制度の内面化

制度の内面化と制度環境の再編

子どもは他者から尊重されることで歴史・文化的に形成された制度の内面化を進めるが，適切な尊重が得られないと承認をめぐる闘争 (Honneth 1996)によって制度自体の変革を試みます。

参考文献

Honneth, A. (1996) The Struggle for Recognition: The Moral Grammar of Social Conflicts, MIT Press.

研究地域と研究課題 / 内容

ボツワナ：定住・集住に伴う「健康」の再編 (定住化) / 近代化政策導入に伴う健康概念の世代差

ナミビア：伝統的権威の復興に伴う「民族間関係」の再編 (民族間交渉) / 伝統文化振興に伴うアイデンティティ再編

カメルーン：自然資源マネジメント政策の導入に伴う「生態学的知識」の再編 (熱帯雨林分割) / 福祉政策と在来の子育て・障害児ケア

コアメンバー

分担者

Matthew Burdelski (大阪大学文学部研究科・教授)

：日本語学、言語社会化

Matthew Burdelski

川島 理恵 (京都産業大学国際関係学部・教授)

：異文化コミュニケーション、医療社会学、会話分析

川島 理恵

連携者

戸田 美佳子 (上智大学総合グローバル学部・准教授)

：生態人類学、障害学

戸田 美佳子

高梨 克也 (滋賀県立大学人間文化学部・教授)

：コミュニケーション科学，身体動作学

高梨 克也

研究地域

ボツワナ　BOTSWANA

定住・集住に伴う「健康」の再編 (定住化)

ボツワナはHIVの蔓延を克服した歴史を持ち，今は他国と同じくコロナ禍に直面しています。ここでは狩猟採集民グイ，ガナ（サンの下位集団）とバントゥ系農牧民カラハリ，ツワナを主な研究対象とします。

グイ，ガナは長い間，カラハリ砂漠で狩猟採集に基づく移動生活を営んでいましたが，政府の再定住化政策により1990年代以降，急速な定住化・集住化，カラハリ，ツワナとの関係の変化を経験しています(丸山 2010)。本研究ではこれに伴うグイ，ガナの健康に関する生活実践や 概念の再編過程に注目する．2022年度から京都大学とMoUのあるボツワナ大学と協力し，ボツワナ中央部のニューカデ村の幼稚園で子どもの健康増進に関するアクション・リサーチ（e.g.トイレの増設，保健の授業導入，健康診断の推進）を実施すると共に日常生活の中で観察します。

参考文献

丸山 淳子 (2010)『変化を生きぬくブッシュマン—開発政策と先住民運動のはざまで』世界思想社

写真. ニューカデ村の様子

写真. ボツワナ大学のキャンパス

ナミビア　NAMIBIA

伝統的権威の復興に伴う「民族間関係」の再編 (民族間交渉)

降雨量等の制約から在来農業の限界地とされるナミビア北中部は，数世紀前からポスト狩猟採集民のクン，アコエ(サンの下位集団)とバントゥ系農牧民オバンボが積極的に交渉してきました。さらに1990年のナミビア独立以降は，政府がオバンボの伝統的権威を復興させ，地域社会の統合を強めています(Takada 2015)。

研究地域

本研究では，これに伴う同地での民族間関係の再編過程に注目します。2022年度から代表者がコチュテルを推進するナミビア大学と協力し，ナミビア北中部のエコカ村の幼稚園で，子どもの民族間交流を促進するアクション・リサーチ(e.g. 離乳食の推奨，語学授業の早期導入，地域の伝統的文化の振興)を実施すると共に日常生活の中で観察します。

参考文献

Takada, A (2015) Narratives on San ethnicity: The cultural and ecological foundations of lifeworld among the !Xun of north-central Namibia, Kyoto University Press & Trans Pacific Press.

写真. ナミビア大学のキャンパス

写真. ナミビア北部乾燥地域、ヒンバ社会の様子

写真. 掻い出し漁の最中に、観察対象の乳児を抱くバカ・ピグミーの少女（カメルーン南東部）

カメルーン　CAMEROON

自然資源マネジメント政策の導入に伴う「生態学的知識」の再編(熱帯雨林分割)

カメルーンでは，狩猟採集民のバカ(ピグミーの下位集団)と近隣のバントゥ系農耕民バクウェレ，コナベンベを主たる研究対象とします。この地域では，大規模な熱帯林伐採が続く一方，生物多様性保全のため多くのプロジェクトが推進されています。そこで本研究では，自然資源マネジメント政策の導入に伴う生態学的知識の再編過程に注目します。2022年度からカメルーン南東部に京都大学が設けたフィールド・ステーションを拠点として，生態学的知識習得の再活性化を促進するアクション・リサーチ(e.g. 生業活動中の一時保育，伝統的知識の授業化，それぞれの障がい児に合った生活環境の構造化)を実施すると共に，日常生活の中で観察します。

海外渡航報告

・高田 明（京都大学 教授） ボツワナ・ナミビア・南アフリカ (2022/09/24 - 12/15) ：ニューカデ村（ボツワナ）、エコカ村（ナミビア）ほか調査・出版記念講演など

・林 耕次（京都大学 研究員）ボツワナ・南アフリカ (2022/9/24 - 10/02) ：研究打ち合わせ等 ボツワナ大学など

・山本始乃（京都大学 大学院生）ナミビア (2022/11/2 - 2023/1/26)：ヒンバ社会での予備調査等

・林 耕次（京都大学 研究員） ナミビア (2022/11/4 - 13)：研究打ち合わせ等 ナミビア大学など

・高田 明（京都大学 教授）カメルーン (2023/02/11 - 23)：ヤウンデでの研究打ち合わせ等 ヤウンデ第一大学など

・林 耕次（京都大学 研究員）カメルーン (2022/8/25 - 9/10, 2023/02/04 - 03/14)：ヤウンデ、東部州ヨカドマ、ロミエでの調査等

・高田 明（京都大学 教授）アイルランド (2022/06/25 - 07/02)：国際学会（CHAGS13）

・高田 明（京都大学 教授） アメリカ合衆国 (2022/12/27 - 2023/01/15)：CLIC, UCLA, UCSDにて研究打ち合わせ等

・川島理恵（京都産業大学 准教授） アメリカ合衆国 (2022/12/27 - 2023/01/5)： UCLA, UCSDにて研究打ち合わせ

・寺本理紗（京都大学 大学院生）アメリカ合衆国 (2023/1/5 - 2023/03/17)：研究打ち合わせ等（UCLA）

・野口朋恵（京都大学 大学院生）ノルウェー (2023/03/26 - 04/02)：国際ワークショップ Contemporary hunter-gatherers and education in a changing world

詳しくは
こちらから

写真. *“Hunters among farmers : The !Xun of Ekoka”* (Takada,2022)の出版記念講演会、開始前の様子
(ナミビア、ウィントフックにて)

写真. ヤウンデ第一大学Antoine Socpa 准教授（左端）らとの研究打ち合わせ
(カメルーン、ヤウンデにて)

写真. 国際ワークショップ Contemporary hunter-gatherers and education in a changing world: Towards sustainable futuresの様子
（ノルウェー、トロムソにて）

おもな業績（1）

論文

高田 明 (2023) 音楽的社会化への相互行為の人類学的アプローチ, 音楽教育学, 52(2), pp.34-41.

高田 明 (2022) 意味の振る舞い、言語使用、文化, 特集：子どものことば、再発見！ 季刊誌「発達」, 172, pp.38-43.

Fujioka, Y. (2023) Classification of Daily Food Sets in an Agro-Pastoral Society in North-Central Namibia: A Comparison of Cluster Analysis and Two-Way Indicator Species Analysis. *African Study Monographs, Supplementary Issue*, 61, pp.187-203.

Yamauchi, T., Hayashi, K., Sai, A. (2023) Co-creation of Water, Sanitation, and Hygiene in Local Communities with NGOs during the COVID-19 Pandemic: From Hunter-gatherers to Urban Dwellers in Cameroon. *Sanitation*, 7 (1), pp.1–6.

藤岡 悠一郎(2022) ナミビア北中部農牧社会における新農法導入にともなう在来知と農業実践の変化–SATREPS プロジェクトを事例に, アフリカ研究, 101, pp.21-34.

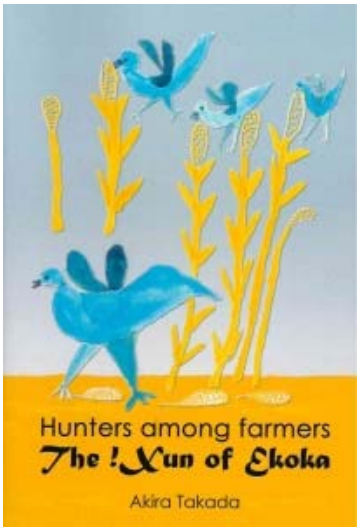
Abe, T., Nishiyama, J., Kushida, S., **Kawashima, M.**, Ohishi, N., Ueda, K. (2023) Tailored opening questions to the context of using medical questionnaires: Qualitative analysis in first-visit consultations, *Journal of General and Family Medicine* (2), pp.79-86.

書籍（単著、編著）

高田 明 (2022)『狩猟採集社会の子育て論：クン・サンの子どもの社会化と養育行動』京都大学学術出版会.

Takada, A. (2022) *Hunters among farmers: The !Xun of Ekoka*. University of Namibia Press.

原田英典・山内太郎 編著（2023)『講座サニテーション学4 サニテーションと健康』 北海道大学出版会.



おもな業績（2）

書籍（分担執筆）

Takada, A. (2022) Families(Chapter 21), Church, A. & Bateman, A. (Eds.), *Talking with children: A handbook for early childhood education.* Cambridge University Press, pp.426-444.

高田 明 (2023) 教育・学習の基盤としての進化と文化, 安藤寿康(編)『教育の起源を探る: 進化と文化の視点から』ちとせプレス, pp.175-189.

橋彌和秀 (2023)「教える」と「教わる」のあいだ, 安藤寿康(編)『教育の起源を探る: 進化と文化の視点から』ちとせプレス, pp.43-63.

川島 理恵 (2023) 意思決定過程における感情表出について（13章）, 小宮友根・黒嶋智美(編)『実践の論理を描く』勁草書房

学会発表等（海外）

Takada, A. (2022) Four approaches to the analysis of gymnastic behaviors among the San of southern Africa. Paper presented at the panel "Four approaches to studying childrearing among hunter-gatherers", at the 13th Conference on Hunting and Gathering Societies(CHAGS13), University College Dublin, Dublin, Ireland, 27th June-1st July 2022.

Yamauchi, T. (2022) Childcare in hunter-gatherer societies: The meaning of alloparenting in which children are raised in groups. The 13th Conference of Hunting and Gathering Societies. University College Dublin, Dublin, Ireland, 27 June-1 July, 2022.

Yamauchi, T. (2022) How do hunter-gatherer children become adults in the forest?: Children's hunting and gathering activities. The 15th International Congress of Physiological Anthropology, The University of Oregon, Eugene, Oregon USA, 15-17 September, 2022.

Nakagawa, H. (2022) A phonesthemic vowel feature in G|ui. KBA Riezlern 2022. Riezlern, Austria. July 19 2022.

Kawashima, K., Maeda, H., Kondo, A. (2022) Q-A sequences in prenatal genetic counseling in Japan; conversation analytic study of NIPT and NT consultations, American Society of Human Genetics, Oct. 2022.

Imai, M., Murai, C., Ohba, M., Hidaka, S., Okada, H., **Hashiya, K.** (2022) The contingency symmetry bias as a foundation of word learning: Evidence from 8-mont-olds in a matching-to-sample task. The 44th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, Toronto, Canada, 27-30 July, 2022.

Kishimoto, R., **Hashiya, K.,** (2023) Reference assignment is dependent on temporal proximity and rarity bias. BCCCD 2023, Budapest, Hungary, 5-7 Jan. 2023.

Pratchett, L., Witzlack-Makarevich, A., Ammann, L., Auer, D., Fehn, A-M., Güldemann, T., Job, S., Lionnet, F., Naumann, C., Ono, H., **Nakagawa, H.**, (2022) Typological features of Consonants in Khoisan languages of the Kalahari Basin Area. Francqui International Professorship Symposium. Antwerp University, Belgium. 9 Dec. 2022.

おもな業績（3）/ 活動報告

学会発表等（国内）

高田 明 (2022) 模倣の自然化: サンの相互行為の分析から，日本アフリカ学会第59回学術大会

高田 明 (2022)「自然人」の誕生: ヴィーコ，リンネ，ルソーを中心に，日本文化人類学会第56回研究大会

高田 明 (2022) 労働市場と学校教育の非対称状況におけるソフトスキルと雇用可能性: アフリカにおけるソフトスキル訓練と開発，国際開発学会第23回春季大会（指定討論）

高田 明 (2022) 狩猟採集民の子育て研究への4アプローチ：クン・サンのジムナスティックの分析事例，第76回日本人類学会大会・第38回日本霊長類学会大会連合大会

中川 裕 (2022) コイサン諸語のクリック子音の音韻分析：SPEと単一音素分析の系譜，日本英語学会第40回大会，オンライン (招待講演)

橋彌和秀(2022) 「こころ」という概念を「個体レベルでの社会的情報の圧縮システム」として考える，社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働による人類進化理論の新開拓 第13回研究会，東京外国語大学

関連イベント

第1回 研究会合（2022年6月14日）オンライン
第2回 研究会合（2022年9月13日）オンライン
第3回 研究会合（2023年1月25日）対面＋オンライン

CCIデータセッション

第105回（2022年7月22日）発表者：牧野 由紀子（元・関西学院大学非常勤講師）
「片付け場面における行為指示/ 応答連鎖ーCCIコーパス２歳児データからー」
第106回（2022年8月5日） 発表者：高田 明（京都大学）
「CCI関西データに見る，敬語による社会的距離の調整」
第107回（2022年8月19日）発表者：森田 笑（シンガポール国立大学）
「仲直りのプラクティス」
第108回（2022年9月2日） 発表者：川島 理恵（京都産業大学）
「患者の泣きにどう対応するか」

子育ての生態学的未来構築コロキアム

(2023年1月25日) 対面＋オンライン
第1回 「サニテーションからみるアフリカ狩猟採集民の未来」
＜講演1＞ 山内 太郎（北海道大学）
「狩猟採集社会の子どものライフスタイルと健康
－食と身体とWASH－」
＜講演2＞ 林 耕次（京都大学）
「狩猟採集民のサニテーション
－定住したバカ・ピグミーの現状と課題－」

事務局より / 編集後記

事務局より

・2022年度6月より始動した本プロジェクトでは、事務局メンバーとして高田 明を筆頭に、野村貴子、中山恵美、小川（河本）裕子、林 耕次により構成されています。プロジェクトに関して何かご不明な点などがございましたら、お気軽にお問い合わせください。

・新年度からは、新たな研究員として杉山由里子さんが加わるほか、海外から招聘研究者の来日が予定されています。引き続きプロジェクトの関連イベント等にもぜひ積極的にご参加くださいませ。

ホームページを公開しました！

(2022年8月9日)

https://www.cci.jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/efm/

編集後記

2022年6月から始動した本プロジェクトは、コロナ禍による国内外の出張規制が緩和し始めたところで、久しぶりに国内外の移動を伴う調査研究・打ち合わせを再開された方も多かったのではないでしょうか。とはいえ、全体会合を含め、学会や研究会などでも依然としてオンラインによるものも続いており、メンバー全員で揃う機会がなかったのは残念でした。新年度を迎え、今後はますますプロジェクトに関連した活動や研究をサポートし、それらについても発信していこうと思います（林）。

2022年度 年次報告書　2023年6月20日発行

編集・発行: 高田 明（研究代表）

問い合わせ先：cci.takada.lab@gmail.com

ASAFAS

Caregiver Child Interaction